



アナウンサー・朗読家

渡辺祥子さん

「10年前には、全てが終わったと思いましたが、お湯が復活したのです」。駒の湯温泉湯守の菅原昭夫さんは、こう話し出されました。そして、続けてお話ししました。「お湯に呼ばれたと思います」

宮城県北部の栗駒山にある駒の湯温泉は、今年開湯400年の長い歴史を誇る温泉ですが、2008年の岩手・宮城内陸地震による土石流の直撃を受けました。旅館とともに7人の尊い命が奪われ、菅原さんも押し流される建物に閉じ込められましたが、肋骨と足を骨折しながらも脱出し、奇跡的に助かったのです。

想像を絶する体験とその惨状から、その後現場に足を踏み入れることが出来なかった菅原さん。しかししばらく後に、友人に誘われかつて旅館があった周辺に行ってみると、お湯が湧き出していたのです。

被災前に利用していた源泉はすべて土石流に埋まってしまいました。湯の華取りに使っていた源泉（以前はじむ程度にしか湯が出ていなかった）が、再び湧き出していたのです。この復活したお湯は、まさに菅原さんにとって、まさに「希望の湯」でした。友人とブルーシートで簡易な風呂を作り身体を浸した時、何とも言えない懐かしさと嬉しさがこみ上げてきたそうです。

言葉のヨココト

「お湯に呼ばれた」

「お湯に呼ばれた」というのは、被災後、お湯が復活したという事実を指している。しかし、この「呼ばれた」という表現には、被災者の心象や感情が込められている。被災後、お湯が復活したという事実を指している。しかし、この「呼ばれた」という表現には、被災者の心象や感情が込められている。

そこから、400年の歴史をつなぐ動きが始まりました。多くの方々のサポートを受けながら、2012年には足湯を始め、2015年には小さな湯船の湯小屋で温泉の営業（日帰り）を再開、2016年からはそばカフェも始めました。

お湯は、38度ほどの源泉をそのまま使ったかけ流し。ぬるめではありますが、「ぬるいからこそゆつくり入れる」「大地のエネルギーがしみ込んでくるようだ」と喜んでくれるお客様が足を運んでいます。

震災直後は、駒の湯の歴史も自分の人生も、全て終わったと思った菅原さん。でも、源泉は終わってはいなかった。お湯は途切れずに湧いていた。そのことが、菅原さんの人生をつなぎ、駒の湯の歴史をつなげる歩みへと導いたのではないのでしょうか。

菅原さんは源泉によって、「ご本人の源泉（原点）に立ち戻されたのかもしれない。そして私たちは、そんな源泉に惹かれ、足を運ぶ…。そう、お湯に呼ばれるのです。」

今年には栗駒山が国定公園に指定されてから50周年。山も美しく色づくこの時期、栗駒の大自然を堪能し、ゆつくりとお湯につかる贅沢を、ぜひ！

りらく 2018年10月号

応援していただいた皆さんへ

平成20年6月14日、最大震度6強の大地震が発生し、静かにい湯が注ぐ温泉宿を土石流が一瞬にして飲み込みました。私は、がれきに挟まれながらも、必死に建物の2階部分に這い出ました。そこで見た光景はまさに絶望的なものでした。自衛隊や消防警察の方々により懸命な捜索が行われ、土の中からお客様2人と従業員3人、そして家族2人が見つけ出されましたが、皆帰らぬ人となってしまいました。助かったのは父と私だけでした。

こんなことが起るなんて、全く信じられません。しかし、地震学者が後に行った調査では3回も大きな地震が起きていることが分かりました。私は地震を恨みました。「私が生きていた時代に起きなくても」とそう思い続ける日々が続く、辛い気持ちでいっぱいでした。その間、地域や全国の皆さんから、たくさんの応援や励ましをいただき、その度に頑張らなくてはと思うのですが、なかなか前に歩みだすことができませんでした。

あの悪夢のような地震から10年、自分を鼓舞するように、温泉の復活に向け、歩んできました。やっとの思いで日帰り温泉を復活させ、徐々にですが、お客様も増えてきました。もちろん、地震前のような賑わいは戻っていませんが、着実に歩みを前に進めています。

応援いただいた皆さんへ ありがとうございます

「駒の湯温泉」の復旧に尽力いただいた皆様へ、心より感謝申し上げます。被災後、多くの方々のサポートのおかげで、お湯が復活し、営業再開することができました。この機会に、被災地の現状や復旧の進捗についてお話しさせていただきます。

これからどうなるかわかりませんが、常連さんや温泉ファン、東日本大震災で被災された方など、これまでいろいろの方々にご支援やご協力をいただき、励まされてきました。本当にありがとうございます。また被災当時は全国のレスキュー隊、警察、消防など決死の救出活動をいただき、本当にありがとうございます。

命拾った私がこうして湯を守っていくことが皆さまへの恩返しになると思います。細々とではありますが続けていくつもりです。

この温泉が少しでも誰かの癒し、心の安らぎをもたらす場所になれば、犠牲となった方々や生き延びた私たちが生きた証になるかもしれません。

支援していただいた皆さんにお会いできる日を山のい湯でお待ちしています。

広報くりはら 平成29年12月1日